



房州とイタリアを愛した画家

寺崎武男・生誕 140 年

***作品資料展** 令和5年3月25日(土)~4月5日(水)

午前10時~午後4時 (最終日3時・月曜休館)

***シンポジウム** 4月1日(土) 午後2時~4時

基調講演 「日伊交流史における寺崎武男」

石井元章 (大阪芸術大学教授)

調査報告 「手帳と書簡から見える寺崎武男の世界」

愛沢伸雄 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表)

会場:千葉県南総文化ホール(館山市北条740-1) **入場無料・資料代500円**

*新型コロナウイルスの感染拡大の場合は中止・変更もございます。会場では感染対策にご協力下さい。



「祖神を偲ぶ天富命の図」



「ベニス」

主催: NPO 法人安房文化遺産フォーラム 問合せ: 0470-22-8271・090-6479-3498

後援: 館山市・南房総市・館山市教育委員会・南房総市教育委員会・館山市観光協会

房日新聞社・安房美術会・安房神社・布良崎神社・下立松原神社

イタリア文化会館・イタリア書房・葦崎大村美術館



房州とイタリアを愛した画家 寺崎武男・生誕 140 年

作品資料展&シンポジウム

寺崎武男は 1907（明治 40）年にイタリアへ渡り、ヨーロッパ美術の諸技法を研究し、日本に紹介した近代絵画の先駆者です。大正末期から千葉県館山市に暮らし、戦後は安房高校の美術講師としても後進の育成に務めました。友人や家族と交わした膨大な書簡や手帳・スケッチ帳から、寺崎家のファミリーヒストリーや壮大なネットワークが見えてきました。日伊親善に尽くした先人の姿を再発見しましょう！

2019（令和元）年の GW、廃校舎で開催した「海とアートの学校まるごと美術館」では、館山ゆかりの 3 人の画家（青木繁・倉田白羊・寺崎武男）を紹介した。この模様は YouTube から見るができる。



なかでも寺崎武男は、日本美術史に大きな影響を与え、国際的に活躍したにも拘わらず、あまり知られていない“幻の画家”である。親交のあった三島由紀夫は、「無理解と孤立には少しも煩はされずに、悠々と、晴朗に、芸術家たるの道を闊歩していた。あくまで走らず、跳ばず、悠揚たる散歩の歩度で。氏こそ、真の意味で、芸術家の幸福を味わった人ではなかろうか」と回顧展にメッセージを寄せている。

1883（明治 16）年 3 月 30 日に東京赤坂で生まれた寺崎は、東京美術学校西洋画科を卒業後、農商務省実業練習生としてイタリアに留学した。以降 3 度 20 年にわたりベネツィアを中心に滞欧し、フレスコ画やテンペラ画・エッチング・壁画・版画など様々な技法を研究し、日本に紹介した。

イタリア政府主催・大蔵喜七郎後援で開かれた「羅馬日本美術展」では、横山大観を中心に、寺崎は通訳・コーディネーターを務めた。観音を描いたテンペラ作品『幻想』は、ヴェニス・ビエンナーレ国際展で日本人初入賞を果たし、イタリア政府買上となった。生涯をかけて東西文化の融合を旨とした寺崎は、その功績から芸術名誉賞はじめ、イタリア国王や政府から多数の勲章などを授与されている。

留学中に「天正遣欧使節」の行跡に出会い感銘を受けた。16 世紀に日本から海を渡り、ローマ法皇に謁見して外交を果たしながらも、禁教から鎖国へ向かう時代に翻弄された少年たちの姿を後世に伝えようと、生涯にわたりこのテーマを描き続けた。

一方、日本国内では創作版画協会やテンペラ画会、壁画協会などを設立したほか、明治神宮の聖徳記念絵画館に『軍人勅諭下賜ノ図』が収められ、東京大学病院や日本医師会館などにも壁画が描かれている。大正期より法隆寺の壁画研究を続けており、早くから防災設備のないことを危惧していた。後に懸念どおり火災が起きて、金堂壁画が焼失したため、その後に法隆寺の輪堂に壁画を描いている。

館山には、美校の師でありイタリア留学の先輩である彫刻家・長沼守敬（ながぬまもりよし）が先に移住していた。彼を慕って訪れるうちに、別荘を館山の西ノ浜に建て、やがて定住するようになる。房総開拓神話を多く描き、安房神社や下立松原神社などに奉納している。なかでも布良崎神社に奉納されたテンペラ画は、鳥居型に額装された貴重な作品である。

戦後、安房高校の美術講師となり、若者たちに情熱あふれる指導を授けた。兵藤益男校長の理解ある支援により、テラコッタで『自由の女神像』を制作した。生徒も教職員も、「まるで外国のようだ」と驚いたという。翌年の校長交代に伴い、取り壊しが命じられたが、千倉の七浦中学校に移転させ解体はまぬがれた。しかし残念なことに数年後、側溝工事の重機で破壊されてしまったという。また、法隆寺の壁画が完成した際には、修学旅行の生徒たちが見学に立寄ったというが、現在は非公開である。

私たちは寺崎家の遺族から、多数の作品とともに数百枚にのぼるハガキや数十冊の手帳・スケッチ帳等の寄贈を受けており、分析調査に取り組んでいる。家族や国際的に活躍する各界の友人らとの密な交流から、幅広い人脈や芸術への情熱などが明らかになりつつある。

ルネサンスの壁画を研究した寺崎の作品は、画面の対角線の 7 倍離れた距離から見ると焦点が合い、奥行きや立体感を感じるという。今回注目すべき作品は、終戦の翌年に描かれた『平和来たる春の女神』という大きな屏風画で、舞台は布良の女神山と阿由戸ノ浜かと推察される。もう一つは『ヴェニスの女』といい、1926（大正 15）年の第 1 回聖徳太子奉讃美術展覧会出品のフレスコ壁画である。ほかにも

ヴェネツィアの風景画や宗教画なども多く、見応えがある。生誕 140 年を記念し、「寺崎武男の世界」を広く紹介したい。



「ベニスにて
公式謁見図」
(天正遣欧使節)